

松村通信第159号

4月29日
松村勝弘

日本を考える

近況 ようやく寒さに苦しめられなくなった。3月22日は経営管理研究科つながりの喜望大地役員会、23日は立命館大学会計学研究会OB会と続いた。25日は立命館大学出身の元阪神の監督吉田義男さんをしのぶ会と続いた。こここのところ相変わらず、立命館大学校友つながりで出かけることが多い。4月に入ると、4月19日「桂米二一門会」という落語会に行った。二葉ちゃんの司会進行でトークが気分転換になった。



その一門会が昼にあって、夜は「日本酒の会同窓会」と続いた。わがゼミ第二期卒業生の女将が経営する「古川町万両」で開くのが恒例となっている。とにかく日本酒オンパレードでまさに「日本酒の会」なのである。



それに26日には恒例の校友会有志「三都クラブ」による「都をどり」だった。もちろん懇親会の楽しみつきである。翌27日には大阪「天満天神繁昌亭」で「立命寄席」があった。何かがあるのが土日なのである。

げんきな日本論? 近頃は大学の図書館も利用しているが、京都市図書館を利用することがある。先日のぞいていたら、橋爪大三郎×大澤真幸『げんきな日本論』(講談社現代新書、2016年)という本に目が行って、借り出して読んだ。博学の二人による日本についての対談だから、話しは多岐におよんでいる。とても全部は紹介できないけれど、興味深かった点だけ、触れてみたい。そのなかで、前号で紹介した、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』に触れられていた。前号でも紹介したように、そこでは、聖書は最初はラテン語であったけれども、プロテスタントはドイツ語など俗語の聖書で攻勢をかけ広まっていった。各地の俗語での出版物が広まって、俗語を通じて国民が形成されていった。それ以外でも新聞や教育とかが国民をつくったが、日本もある種例外ではなかった。知識人はラテン語聖書を通じてある種の共同体を形成していたが、限られていた。日本でも江戸時代までは、漢文を通じて、知識人は中国、朝鮮と交流できていた。だが、日本では仮名、そして寺小屋などの教育システムが発達していたので、早くから国民意識が形成される素地ができていた。漢字仮名交じり文はまさに、「俗語」であった。しかも参勤交代なども日本人に運命共同体の一員だと感じさせた。大澤は言っている(405頁)。また「少なくとも武士を中心としたエリートの間では、かなり強い同胞意識が育っていたと推測」(同)できると言っている。さらにこうも言っている。「[アーネスト・]ゲルナーは、産業化がいかにナショナリズムにつながるかという話をしている。なぜ彼が産業化に目をつけたかというと、産業化すると社会移動の可能性が高まり、社会が流動化するからです。産業化以前の社会だと、たとえば、文字を使える政治的・文化的なエリート層と大多数の農民層とで、社会が階層化してしまう。階層の間を移動する人の比率は小さいし、またそのような移動の必要もない。

さて、日本の場合は、江戸時代、産業化していたとは言えないかもしれないけれど、しかし、流動性はすでにそうとう高くなっている。身分があるにもかかわらず、やがてみんなが国民同胞だと考えることができる下準備ができていた。」(412頁)言われているように、

それは「下準備」でしかなかった。日本で「国民意識」が形成されるのは明治期であった。とりわけ、庶民層にまで「国民意識」が「浸透」（「形成」というべきか）してくるのは明治期であった。このあたりについて、詳しく論じているのは下記『ナショナリズム』である。

姜尚中『ナショナリズム』 京都市図書館を活用していると、先に書いたが、そこで見て気になって読んだのが姜尚中『ナショナリズム』（講談社学術文庫、2018年）だ。この本でも、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』に言及されていた(24,38頁)。

「国民意識」がとりわけ、庶民層にまで浸透する、あるいは浸透させて、「国民国家」を形成しようと、明治期の指導者は腐心したことが本書を読めばわかる。西郷隆盛を押し立てて、薩摩士族が明治政府に反旗を翻した西南戦争はだれもが知っているだろう。これに対する庶民の感情はどのようなものであったのか。本書ではこう言っている、

「西南戦争のさなかで逃げ惑う熊本城下の一農婦にとっては戦闘も政治的忠誠心も狂気の沙汰にしか実感されなかった。『日本人』としての国民(ネーション)はどこにもなかったのである。ここでは先に紹介したようなイタリア統一後の最大の問題、つまり『イタリアはつくられた、これからはイタリア人をつくらねばならない』という統一的な国民(ネーション)創出の課題とほぼ同じような難問が突きつけられていたのである。」(86頁)

この段階ではまだ日本国内に生きていた人々すべてにとっての日本という国は形成されていなかったわけである。上記難問を解くため、明治政府の指導者は、まさに「日本国民」の形成に腐心したわけである。明治期の日本で、「お国のために死ぬ」ほどの愛国心を持っていたのはどれくらいであったろう。ベネディクト・アンダーソンはその国のために死ぬほどの国・共同体こそが「想像の共同体」だと言っている。

<自然>と<作為> 国民国家には観念の二重性があるという。すなわち国民国家は「一方では自生的な共同体としてあらわれ、他方では作為的な抽象的統一体とみなされることを意味している」(37頁)という。

姜尚中は、清水幾多郎が戦争中に、南方から日本に向かう輸送船に乗っていたときに、長崎あたりの日本の陸地を見たときに、彼が長崎に住んだこともないのに、「抱きつきたい」思いを抱いたことを述べていたが、これに関して姜尚中はこう書いていた。「ここで清水が指摘している『自然の傾向』と『人為

的接合剤』の二重性は、ネーションが、日常の身近な対面的コミュニケーションがつくり出す田園風物詩的な愛情の対象にとどまらず、その範囲をはるかに越えたゲゼルシャフト的な社会関係や領域をも包含する『想像の共同体』（ベネディクト・アンダーソン）であることを意味している。」(38頁)

二重性について、このように述べている。日本国民が日本という国に対して抱く感情の二重性を指摘している。明治政府は政治的作為によって国を形成しようとしたが、『教育勅語』と『軍人勅諭』が「作為的な制度としての天皇を常に自然的な所産として表象させる仕掛けだった」(90頁)という。そしてそれは「国体」の「精神」を意味していたという。

さらに、「限りない『憧れの対象』としての天皇、その天皇に服することは、『自然の心』のあるがままの発露にほかならないことになる。この『ココロ主義』をベースにして形づくられる君民一体の共同体こそ、まさしく『国体』なのであって、それは『人工』的な不純物(西洋近代の『個人主義思想』とそのコロラリー)が入る余地がないほど<自然>の合一そのものになっているのである。」(113頁)

戦後「国体」 さらに、「日米合作・談合の戦後『国体』」(143頁)についても述べている。敗戦時、降伏の条件として、天皇制存続・「国体」護持を条件とするという含みでポツダム宣言を受け入れ、アメリカは占領下、天皇制を利用したことは有名である。これを姜尚中は「日米合作・談合」と言っている。

すなわち「戦後『国体』は、『外部』の『超権力』の介入をテコに『現人神』を憲法の『内部』に封じ込め、それを政治的には『イノセント』な『象徴』に『変身』させることで再生した。新たな『立憲民主国家』だった。ただ、それが国民主権によって『民主』となったとしても、『国体』は途絶したわけではない。『談合体制』としての戦後『国体』は、米国という『超権力』を内部化しつつ、あるいはその眼差しで自らをながめつつ、同時に政治的に『イノセント』な、その意味ではより根源的な天皇と国民の共同体に回帰する形をとったからである。」(134頁)

姜尚中は「国体」は護持されたと考えているようだ。

HP, FBを見て下さい。又何でも意見を。
皆さんのご意見を歓迎します。HP
(<http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/>)もご覧下さい。
フェイスブックもやっています。また、メールで意見
交換しましょう。メールをよこして下さい
(matumura@mba.ritsumei.ac.jp)。